

二〇一三年八月四日

諍いを悔いつ片陰戻りけり  
幼名で呼び合ふ座敷初盆会  
減らず口達者となりて夏休み  
二〇二三年八月三日

ほんばこのお腹にフリル子の水着  
クーラーを効かせ看護の今後聴く  
群青に空洗ふごと月涼し  
苔涼し碑に寄進者の我が名あり  
待ち人もいまは鬼籍や打水す

炎天下人影の無き漁師町  
瘦せゆくは詮なき事よ心太  
一一〇二三年八月一日

名を呼べば向日葵畑に猫庵ふ  
芋の葉が行くてを塞ぐ観音径  
遠花火土手に影絵の人の列  
好まねどエアコン頼む猛暑かな  
突風と戦ふ家路雷雨急  
今日もまた遠雷のみで雨降らず  
大摩崖仏へと容赦なき西日

熱帶夜コンビナートは煌々と  
傘の陰手向く目高の手水鉢

うつぎ もとこ たか子 智恵子  
たか子 みき うつぎ セイジベイ  
たか子 お うつぎ えいじべい  
たか子 たか子 みき うつぎ  
たか子 ぽんこ そくしゅう こすもす  
たか子 ほんこ そくしゅう こすもす  
たか子 まゆべ まゆべ まゆべ  
たか子 まゆべ まゆべ まゆべ  
たか子 まゆべ まゆべ まゆべ

塩餡を舐めて猛暑に耐へにけり  
海原の間遠に響く遠花火  
夫婦してお昼寝タイム日課とす  
ひ孫らの経たどたどし初盆会  
対岸の島浮かびたる遠花火  
一〇二三年七月三〇日

秋蝉やまた訃報聞く同窓会  
夏休み孫と息子の焼くプリン  
富士見えて歎声あがるバス涼し  
落ち蝉の残る命の足動く

一〇二三年七月二九日

毎日句会みのる選・二〇一三年八月六日